

杉本健吉コレクションについて

木本 文平

碧南市藤井達吉現代美術館は、令和5年度に画家の故杉本健吉氏のご遺族から同氏が収集されたコレクションと自作を含む265点の作品と資料66件のご寄贈を受けました。

その寄贈絵画265点の内訳は、杉本氏自身の作品が208点で、残り57点は本人が収集されたものでした。膨大な点数のため詳細な調査報告にはもう少し時間が必要かと思えます。とくに杉本作品の風景スケッチについては、取材場所が多岐に渡っている関係から取材場所や制作年などについての調査を慎重に進める必要があります。

さて今回の紀要では、杉本健吉氏が収集・所蔵された作品（以下杉本コレクション）についての紹介をいたします。

杉本コレクションの特色は、形成の骨格となっているのが杉本氏と直接交流のあった作家の作品、もしくは彼自身の制作上において重要と思われる作品で構成されていることです。

とくに杉本氏が師事し、終生敬愛してやまない岸田劉生（1891-1929）の作品類が21点も含まれています。次に多いのが杉本氏と共に奈良の観音院で修行に励んだ須田尅太（1906-1990）の13点、そして杉本氏が制作上において関心を持った朝鮮の民画15点や東大寺塔頭観音院住職の上司海雲（1906-1975）から譲り受けた伝・文徴明（1470-1559）の卷子などが挙げられます。これらの作品について紹介する前に、まずは画家・杉本健吉についての簡単な紹介と岸田劉生（以下劉生）との師弟関係について述べておきます。

杉本健吉は明治38年名古屋市に生まれ、平成16年に満98歳で亡くなるまで画家として幅広く旺盛な活動を続けました。彼は愛知県立工業学校の図

案科を大正12年に卒業し、観光ポスターなどの凶案業を営みながら絵画制作に取り組んでいました。20歳の時に、関東大震災後京都に移り住んでいた劉生を訪ね、弟子入りを許されています。そして昭和4年の劉生没後は梅原龍三郎に師事し、戦中から戦後にかけての奈良・大和地域を描いた作品によって、洋画や日本画といったジャンルの垣根を越えた表現の画風を確立しました。戦後、吉川英治の連載小説『新・平家物語』や『私本太平記』などの挿絵を担当し、全国的にその存在が知られました。その後も世界の各地を訪れ「つくり絵は好みません。生まれる絵をあこがれます」を信条に、自由闊達な表現による臨場感あふれる作品を誕生させて多くの人々を魅了し、平成16年に満98歳で絵筆を置くまで生涯現役を全うした画家でした。

さて、杉本健吉と劉生の出会いですが、大正12年の関東大震災で被災した劉生は、当地の支援者であった鈴木鎌造と片野元彦の手配により、京都へ転居する途中で一時名古屋に滞在しました。この時、滞在先となったのは名古屋の南武平町にあった片野元彦の家でした。この片野は劉生の下で洋画を学び、草土社の公募展に応募し入選した人物で、戦後は国画会で染色家として名をなしています。なお、この片野家は葉問屋を営んでいた家系で、劉生の父・吟香と親しい関係にありました。(註1)

杉本の話によれば、大正12年9月18日の夜に鈴木鎌造に連れられて、劉生の滞在先の片野家へ行き劉生に会ったとのこと。しかし、劉生日記には「夜鈴木鎌造君来訪」と記されているのみで、当時18歳であった杉本の名前はありませんでした。正式に彼が弟子入りとなったのは二年後の大正14年20歳の時で、京都の南禅寺草川町に転居していた劉生を訪ね入門を許されました。その頃の劉生は、「江賀海鯛(エガカイタイ)先生」と自称し中国の宋元画や初期肉筆浮世絵の収集に熱中し、自身の作品も東洋画的な傾向のものが多くなっていました。

さて入門を許された杉本ですが、京都から鎌倉の長谷に移った劉生から内弟子の誘いがあったとのこと。しかし、この件については家庭の事情を話し、丁重にお断りをして名古屋から鎌倉へ夜汽車で通い、本格的な指導



① 岸田劉生《劉生・麗子像》

1928年

を受けたと言います。(註2) この劉生からの直接的な指導は、昭和4年に劉生が急逝するまでのおよそ5年間という短い期間でありました。しかし、後日の回顧において、絵についての骨格づくりを劉生から得ることが出来たと語っています。(註3) こうした師弟関係のなか、杉本のコレクションとなった劉生作品については次のものがあります。

① 《劉生・麗子像》鉛筆、紙 額装 1928年(昭和3)制作 縦21.4×横19.0cm

この素描はスケッチをする劉生とそれをのぞき込む麗子が描かれている貴重なものです。

② 《竹林七童図》紙本着色、墨書 軸装(共箱) 1926年(大正15)制作 縦124.0×横34.1cm 「劉生の会鑑定証No. 635」

劉生は日本の画家では富岡鉄斎の作調に関心を持っており、この作品も自由奔放な筆使いや豊かな彩色からその影響が窺えます。

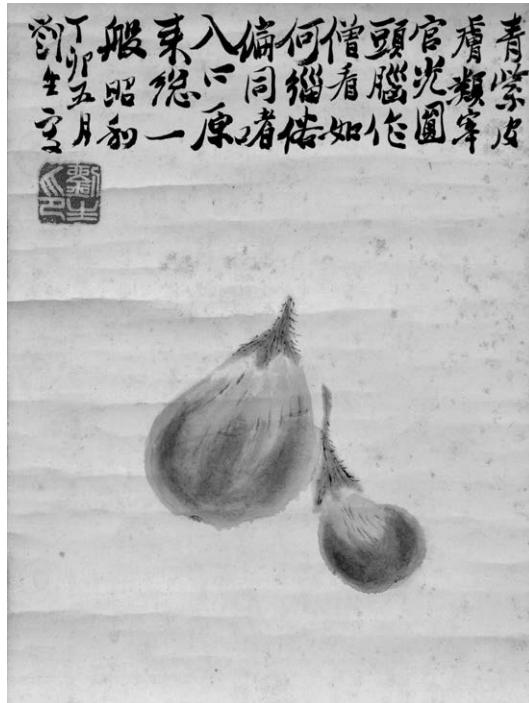
③ 《茄子》紙本着色、墨書 軸装 1927年(昭和2)5月 縦29.0×横21.5cm 「劉生の会鑑定証No. 637」

劉生の日本画は南画的な描法と院体風の写生に大別されますが、この作品はその中間的な表現となっています。

作品①から③については、杉本が戦前から所蔵していたものといえます。それは、ご遺族が整理・編集された『絵描き杉本健吉の昭和20年—1945年の手帳より—』(2020年2月10日発行)に収録されている「應召後の処置」の文中に「……岸田劉生氏の日本画(竹林七童、茄子図、麗子素描(先生の側に立てる))は岸田氏をよく識る人以外には渡さざること……と記載されています。これは、終戦の年に書かれた手帳の最後の頁に、杉本本人が来るべき応召に備え、家族への遺言と思われる記述があり、その文中からの抜粋です。他にも「絵のことは鈴木鎌造氏、大谷房吉氏に一任の事 希望《博物館中央》は個人の所蔵でなく、例えば奈良



② 岸田劉生《竹林七童圖》
1926年



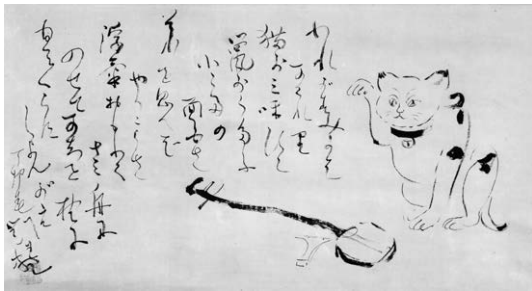
③ 岸田劉生《茄子》
1927年



⑦ 岸田劉生《籠中競甘》



⑥ 岸田劉生《三柿三色》



⑨ 岸田劉生《猫と小唄》



⑧ 岸田劉生《四時甘》
1926年



⑩ 岸田劉生《猫の恋》



⑪ 岸田劉生《竹林七童図》

- ⑪ 《竹林七童図》紙本着色、墨 軸装 制作年調査中 縦 83.7 × 横 16.0 cm
- ⑫ 《秘画1》紙本墨画 軸装 制作年不明 縦 22.5 × 横 36.6 cm
- ⑬ 《秘画2》紙本墨画 捲り 制作年不明 縦 37.7 × 横 50.9 cm
- ⑭ 《画稿1（茄子）》着色、紙 捲り 制作年調査中 縦 131.0 × 横 34.5 cm
- ⑮ 《画稿2（婦人像）》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 83.8 × 横 34.5 cm
- ⑯ 《画稿3（山水図）》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 132.0 × 横 34.3 cm
- ⑰ 《画稿4（狗）》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 38.9 × 横 49.0 cm

この画稿は、1923年制作の院体風写生描法による《白狗図》の草稿と思われる。

- ⑱ 《画稿5（花）》墨、紙 捲り 制作年調査中 縦 39.3 × 横 27.3 cm
 - ⑲ 《画稿6（冬瓜と葡萄）》墨、紙 制作年調査中 縦 39.7 × 横 49.6 cm
- この画稿は、1926年制作の宋元画風の描法による《冬瓜茄子図》の構図との類似性が窺えます。
- ⑳ 《画稿7》着色、紙 捲り 制作年調査中 縦 45.8 × 横 58.9 cm
 - ㉑ 『造形藝術の二要素』（劉生自筆原稿）墨、鉛筆、着色 紙 卷子 1926年（大正15）10月 縦 24.1 × 横 342.0 cm

この原稿は岡山市教育四十年を記念して、同市深柙小学校で「造形藝術の二要素」について講演したものです。所々に劉生による朱字のチェックがあり、リアル感にあふれるものがあります。以上が杉本コレクションに含まれる岸田劉生関係の作品および資料です。これらの作品類のうち一部は展覧会で公開されたものもありますが、多くは未公開のものといえます。とくに劉生が描いた秘画や滑稽画そして草稿画などは一般的には目に触れる機会は無かったといえましょう。また、私自身、劉生の画論を述べた自筆原稿を見るのは初めてのことで、あらためて杉本と劉生の関係の深さを垣間見た思いです。なお、劉生の画論の原稿は、杉本が観音院の上司海雲から譲られたものです。

杉本コレクションには、注目すべき作品として劉生作品のほかに冒頭に



⑬ 岸田劉生《秘画2》



⑫ 岸田劉生《秘画1》



⑮ 岸田劉生《画稿2》



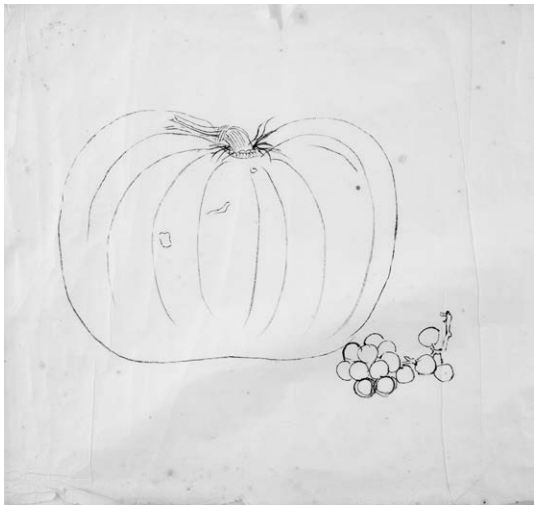
⑭ 岸田劉生《画稿1》



⑰ 岸田劉生《画稿4》



⑯ 岸田劉生《画稿3》



⑲ 岸田劉生《画稿6》



⑱ 岸田劉生《画稿5》